

看護系大学院における看護研究法の教育実態

東邦大学医学部看護学科国際保健看護学研究室教授・学科長
高木 廣文 ● Takagi Hirofumi

はじめに

我が国の看護教育の大学化が進み、看護系大学は現在187校に達しており、200校を超えるのも間近である。これに伴って、最近15年くらいの間に大学院を有する看護系大学数も急激に増加した。2008年時点で、166校の大学に博士前期課程(修士課程)が存在し、そのうちの50校に博士後期課程(博士課程)がある。

このような急激な変化に対応して、看護学が発展するための基盤は整えられているのだろうか。すなわち、大学院における教育・研究を指導するための教育の実情はどのようになっているのであろうか。これから20年後、30年後の看護学の発展を期待するのなら、それを支える研究者を育てることが必須である。その土台となるべき大学院の課程で「看護学研究者を育てる」ために、今どのような教育が行われているのだろうか。

今回、上記のような疑問点を明らかにするために、INR編集部が中心となり、看護系大学院での看護学研究法に関する教育実態を調査することになった。

調査対象として、全国の看護系大学院のある110大学を任意に選定し、INR編集部から依頼文とともに自記式調査票を2008年12月中旬に発送した。調査票の返送とともに、シラバスも可能ならば同封してくれるように依頼した。

調査票の質問項目は、博士課程の有無、修士課程および博士課程での量的研究の教育に関する各13項目、修士課程および博士課程での質的研究の教育に関する各17項目、質的研究と量的研究の研究会やゼミの開催に関する各6項目、総計74項目であった(表1～6)。

調査票の回収は、2009年1月中で締め切った。回収数は37大学(回収率40.7%)であったが、調査票の記載がほとんどない2校を除き、今回は35校(有効回収率38.5%)を分析対象とした。なおシラバスを送っていただいた大学は22校(24.2%)であったが、今回は調査票のみの集計結果を報告する。

なお、今回の調査の回収率は必ずしも十分に高いものではなく、特に博士課程に関しては、12大学のための回答であり、必ずしも全国の平均的な実態を正確には表していない可能性が高い。したがって本調査結果に関しては、今後の大学院教育を考える上での、一つの参考資料として考慮していただければよいのではないかと考えている。

修士課程での量的研究法の授業について(表1)

表1の1に示したように、すべての大学院の修士課程で量的研究法に関する講義が行われており、平均9.3コマ(1コマは90分)程度の時間数であった。演習に関しては、76.5%で実施されており、平均6.8コマ程度の時間数であった(なお、本報告では無回答は各集計から除いて百分率を計算している)。

講義は、統計学的調査法は96.9%、基礎統計学97.1%とほとんどの修士課程で行われていた。また、統計学的検定88.6%、多変量解析82.9%とかなり高率であった。これらの講義時間は1.9～3.1コマであった。尺度構成法の講義は68.6%とやや低く、時間数も1.3コマと少なかった。一方、これらの内容の演習は48.3～66.7%と、講義に比べると低率であり、時間数も1.6～2.2コマとやや低かった。

授業の担当教員は、専任が74.3%と最も多く、非常勤講師との分担22.9%を加えると、97.1%と大部分を占めた。

修士課程での質的研究法の授業について(表2)

表2に示したように、講義がないのは3%のみで、97%の大学院で講義が行われていた。その時間数の平均は5.5コマであった。ただし、演習は37.9%が行っておらず、62.1%が実施し、平均時間数は3.8コマであった。

講義では、グラウンデッド・セオリー・アプローチが最も多く、90.9%の割合で実施されていた。次いで調査技法の90.6%であったが、平均時間数は1.2コマと少なかった。

表1 修士課程での量的研究法の授業について

1. 量的研究法の授業の有無			
講義：①なし	0	②あり	35 (100.0) (9.3) コマ程度*
演習：①なし	8 (23.5)	②あり	26 (76.5) (6.8) コマ程度
2. 統計学的調査方法			
講義：①なし	1 (3.1)	②あり	31 (96.9) (3.1) コマ程度
演習：①なし	11 (35.5)	②あり	20 (64.5) (2.2) コマ程度
3. 基礎統計学(代表値、分散、相関係数など)の授業の有無			
講義：①なし	1 (2.9)	②あり	34 (97.1) (1.9) コマ程度
演習：①なし	10 (33.3)	②あり	20 (66.7) (2.0) コマ程度
4. 統計学的検定(信頼区間など)の授業の有無			
講義：①なし	4 (11.4)	②あり	31 (88.6) (2.2) コマ程度
演習：①なし	11 (36.7)	②あり	19 (63.3) (2.2) コマ程度
5. 多変量解析(重回帰分析、主成分分析、因子分析など)の授業の有無			
講義：①なし	6 (17.1)	②あり	29 (82.9) (2.2) コマ程度
演習：①なし	12 (40.0)	②あり	18 (60.0) (2.0) コマ程度
6. 尺度構成法の授業の有無			
講義：①なし	11 (31.4)	②あり	24 (68.6) (1.3) コマ程度
演習：①なし	15 (51.7)	②あり	14 (48.3) (1.6) コマ程度
7. 授業の担当教員			
①主に専任教員	26 (74.3)		
②主に非常勤講師	1 (2.9)		
③専任教員と非常勤講師が分担	8 (22.9)		

*平均コマ数、以下同様

質的研究の基礎となる哲学的背景については87.9%が講義しており、時間数も2.2コマとやや多かった。現象学的アプローチの講義は75.0%で行われ、時間数は1コマ程度であった。

エスノグラフィーの講義は63.3%で行われ、時間数は1.8コマであった。修正グラウンデッド・セオリー・アプローチは55.5%で、半数程度で講義が行われ、かつ時間数は1コマであった。K-J法は27.6%と少なく、コマ数も0.8と軽く触れる程度であった。

演習に関しては、調査技法が42.9%と最も多かったが半数以下であり、時間数も1.9コマであった。グラウンデッ

表2 修士課程での質的研究法の授業について

1. 質的研究の授業の有無			
講義：①なし	1 (3.0)	②あり	32 (97.0) (5.5) コマ程度
演習：①なし	11 (37.9)	②あり	18 (62.1) (3.8) コマ程度
2. 質的研究の基盤となる哲学的背景			
講義：①なし	4 (12.1)	②あり	29 (87.9) (2.2) コマ程度
演習：①なし	19 (76.0)	②あり	6 (24.0) (2.2) コマ程度
3. 調査技法(面接法、情報提供者の選択方法、参与観察など)			
講義：①なし	3 (9.4)	②あり	29 (90.6) (1.2) コマ程度
演習：①なし	16 (57.1)	②あり	12 (42.9) (1.9) コマ程度
4. 現象学的アプローチ			
講義：①なし	8 (25.0)	②あり	24 (75.0) (1.0) コマ程度
演習：①なし	17 (70.8)	②あり	7 (29.2) (1.3) コマ程度
5. グラウンデッド・セオリー・アプローチ			
講義：①なし	3 (9.1)	②あり	30 (90.9) (1.2) コマ程度
演習：①なし	15 (62.5)	②あり	9 (37.5) (1.2) コマ程度
6. 修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ			
講義：①なし	13 (44.8)	②あり	16 (55.2) (1.0) コマ程度
演習：①なし	15 (75.0)	②あり	5 (25.0) (1.2) コマ程度
7. K-J法			
講義：①なし	21 (72.4)	②あり	8 (27.6) (0.8) コマ程度
演習：①なし	17 (85.0)	②あり	3 (15.0) (1.2) コマ程度
8. エスノグラフィー			
講義：①なし	11 (36.7)	②あり	19 (63.3) (1.8) コマ程度
演習：①なし	17 (73.9)	②あり	6 (26.1) (1.3) コマ程度
9. 授業の担当教員			
①主に専任教員	23 (71.9)		
②主に非常勤講師	0		
③専任教員と非常勤講師が分担	9 (28.1)		

ド・セオリー・アプローチが37.5%、現象学的アプローチ29.2%、エスノグラフィー26.1%、修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ25.0%、質的研究の基礎となる哲学的背景が24.0%、K-J法15.0%と実施割合は低く、時間数も1.2コマか1.3コマ程度であり、質的研究の基礎となる哲学的背景が1.9コマとやや多かっただけである。

質的研究の授業の担当は、主に専任教員が71.9%と最も

多く、非常勤講師のみに任せている所はなかった。

博士課程での量的研究法の授業について(表3)

博士課程に関しては、回答数が少ないため、目安にしかないものと考えられるが、実施されていることも事実なので、参考のため結果を述べる。

量的研究法の授業を行っているのは50.0%と、ちょうど半数であり、平均時間数は15.8コマであった。演習についても55.6%で行われており、平均7.7コマであった。

量的研究法の各授業内容の実施状況は、33.3%から55.6%の間であり、3分の1から2分の1程度の実施割合であった。ただし、時間数を見ると、多変量解析の授業が、平均6.3コマ、演習も5.5コマと他と比べてかなり多かったことは注目すべきである。授業の担当教員は、主に専任教員が66.7%と最も多かった。

博士課程での質的研究法の授業について(表4)

質的研究法の授業として、講義は58.3%が、演習は33.3%が行っていた。平均時間数は講義13.8コマと、ほぼ2単位程度であったが、演習は2.5コマと少なかった。

質的研究の基礎となる哲学的背景は講義60.0%、平均時間数は5.8コマと、他の調査項目に比べて、実施の割合が最も多かった。その他の項目で、講義を行っている割合が高かったのは、現象学的アプローチ50.0%、調査技法40.0%であった。

グラウンデッド・セオリー・アプローチ、修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ、エスノグラフィーは、講義の実施割合は30.0%であった。K-J法の講義は20.0%で行われていた。ただし、講義の時間数は、1~2.3コマであり、それほど多くの時間数ではなかった。

一方、演習に関しては、グラウンデッド・セオリー・アプローチが66.7%と最も高い実施割合であり、次いでK-J法の50%であった。しかし、時間数は平均1コマ程度であり、実際の応用のための演習としては十分に行われてはいなかった。

表3 博士課程での量的研究法の授業について

1. 量的研究法の授業の有無			
講義：①なし	6 (50.0)	②あり	6 (50.0) (15.8) コマ程度
演習：①なし	4 (44.4)	②あり	5 (55.6) (7.7) コマ程度
2. 統計学的調査方法			
講義：①なし	6 (54.5)	②あり	5 (45.5) (4.0) コマ程度
演習：①なし	3 (50.0)	②あり	3 (50.0) (1.0) コマ程度
3. 基礎統計学(代表値、分散、相関係数など)の授業の有無			
講義：①なし	5 (45.5)	②あり	6 (54.5) (2.7) コマ程度
演習：①なし	4 (57.1)	②あり	3 (42.9) (3.0) コマ程度
4. 統計学的推定(信頼区間など)の授業の有無			
講義：①なし	5 (50.0)	②あり	5 (50.0) (1.0) コマ程度
演習：①なし	4 (66.7)	②あり	2 (33.3) (1.0) コマ程度
5. 多変量解析(重回帰分析、主成分分析、因子分析など)の授業の有無			
講義：①なし	5 (45.5)	②あり	6 (54.5) (6.3) コマ程度
演習：①なし	4 (57.1)	②あり	3 (42.9) (5.5) コマ程度
6. 尺度構成法の授業の有無			
講義：①なし	6 (60.0)	②あり	4 (40.0) (1.5) コマ程度
演習：①なし	4 (66.7)	②あり	2 (33.3) (1.0) コマ程度
7. 授業の担当教員			
①主に専任教員	4 (66.7)		
②主に非常勤講師	1 (16.7)		
③専任教員と非常勤講師が分担	1 (16.7)		

質的研究法の担当教員は、50.0%が「主に専任教員」と回答していたが、半数は非常勤講師に依頼していた。

質的研究のためのゼミや定期的な勉強会などの開催について(表5)

質的研究のためのゼミや定期的な勉強会を開催していると回答した割合は30.3%であり、70%近くの大学では実施していなかった。

実施している場合の対象は、大学院生(修士90.0%、博士50.0%)のみでなく、教員も対象に含めるとした回答が70.0%であり、大学院教育に限定していないことがわかる。

表4 博士課程での質的研究法の授業について

1. 質的研究の授業の有無			
講義：①なし	5 (41.7)	②あり	7 (58.3) (13.8) コマ程度
演習：①なし	6 (66.7)	②あり	3 (33.3) (2.5) コマ程度
2. 質的研究の基盤となる哲学的背景			
講義：①なし	4 (40.0)	②あり	6 (60.0) (5.8) コマ程度
演習：①なし	6 (75.0)	②あり	2 (25.0) (1.0) コマ程度
3. 調査技法(面接法、情報提供者の選択方法、参与観察など)			
講義：①なし	6 (60.0)	②あり	4 (40.0) (2.0) コマ程度
演習：①なし	4 (66.7)	②あり	2 (33.3) (1.0) コマ程度
4. 現象学的アプローチ			
講義：①なし	5 (50.0)	②あり	5 (50.0) (2.3) コマ程度
演習：①なし	5 (71.4)	②あり	2 (28.6) (1.0) コマ程度
5. グラウンデッド・セオリー・アプローチ			
講義：①なし	7 (70.0)	②あり	3 (30.0) (1.0) コマ程度
演習：①なし	2 (33.3)	②あり	4 (66.7) (1.0) コマ程度
6. 修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ			
講義：①なし	7 (70.0)	②あり	3 (30.0) (1.0) コマ程度
演習：①なし	4 (66.7)	②あり	2 (33.3) (1.0) コマ程度
7. K-J法			
講義：①なし	8 (80.0)	②あり	2 (20.0) (2.0) コマ程度
演習：①なし	3 (50.0)	②あり	3 (50.0) (1.0) コマ程度
8. エスノグラフィー			
講義：①なし	7 (70.0)	②あり	3 (30.0) (1.0) コマ程度
演習：①なし	4 (66.7)	②あり	2 (33.3) (1.0) コマ程度
9. 授業の担当教員			
①主に専任教員			4 (50.0)
②主に非常勤講師			2 (25.0)
③専任教員と非常勤講師が分担			2 (25.0)

これは、表5の3で、ゼミへの参加について「自由に参加できる」が80.0%であることにも対応している。

質的研究のゼミなどを実施している場合、実施間隔は、1週間に1回および1年に数回が33.3%であり、実施回数には大きな開きが見られる。2週間に1回も22.2%あるので、2週間に1, 2回で55.6%と過半数を超えている。

1回の開催時間は、1～2コマ程度(2時間も含める)で

表5 質的研究のためのゼミや定期的な勉強会などの開催について

1. 質的研究のためのゼミや定期的な勉強会を開催していますか	
①はい	10 (30.3) ②いいえ 23 (69.7)
2. 対象者(複数回答)について	
①卒研究生	1 (10.0) ②院生(修士) 9 (90.0)
③院生(博士)	5 (50.0) ④教員 7 (70.0)
3. ゼミなどへの参加は自由ですか必須ですか	
①必須科目	1 (10.0) ②自由に参加できる 8 (80.0)
③その他	1 (10.0)
4. 実施間隔	
①1回/週	3 (33.3) ②1回/2週 2 (22.2)
③1回/月	1 (11.1) ④数回/年 3 (33.3)
5. 1回の開催時間	
①1コマ	3 (33.3) ②2コマ 2 (22.2)
③2時間	3 (33.3) ④他 1 (11.1)

88.9%と大部分を占めていた。

量的研究のためのゼミや定期的な勉強会などの開催について(表6)

量的研究のためのゼミや定期的な勉強会を開催していると回答した割合は21.2%であり、質的研究よりもやや低く、ほぼ8割の大学では実施していなかった。

実施している場合の対象は、大学院生(修士100%、博士57.1%)のみでなく、教員も対象に含めるとした回答が100%であり、質的研究の場合と同様に大学院教育に限定していないことがわかる。ゼミへの参加が、「自由に参加できる」が71.4%と必ずしも必須とはしていない。

量的研究のゼミなどを実施している場合、実施間隔は、1週間に1回と1年に数回とが、28.6%と同じであり、やはり実施回数には大きな開きが見られる。2週間に1回が28.6%なので、2週間に1, 2回で57.1%と過半数を超えている。

1回の開催時間は、1～2コマ程度(2時間も含める)で100%であった。

表6 量的研究のためのゼミや定期的な勉強会などの開催について

1. 量的研究のためのゼミや定期的な勉強会を開催していますか
①はい 7(21.2) ②いいえ 26(78.8)
2. 対象者(複数回答)について
①卒研生 1(14.3) ②院生(修士) 7(100.0)
③院生(博士) 4(57.1) ④教員 7(100.0)
3. ゼミなどへの参加は自由ですか、必須ですか
①必須科目 1(14.3) ②自由に参加できる 5(71.4)
③その他 1(14.3)
4. 実施間隔
①1回/週 2(28.6) ②1回/2週 2(28.6)
③1回/月 1(14.3) ④2回/年 2(28.6)
5. 1回の開催時間
①1コマ 3(42.9) ②2コマ 2(28.6) ③2時間 2(28.6)

おわりに

今回、全国の看護系大学院での看護研究法の授業に関する調査結果を報告した。急いで行った調査のため、回答しにくい項目もあったものと思われる。そのためか回収率も低かったので、本調査結果が、必ずしも全国の看護系大学院の教育実態を正確に反映しているとは限らない。しかし、少なくとも、調査に回答していただいた大学院の実態であることは事実であり、今後の看護研究法の講義や演習の内容を考慮する場合、一つの参考資料にはなるのではないだろうか。

最後に、本調査にご協力いただいた看護系大学院の関係者の皆様に深謝いたします。

ヘルスプロモーション実践の変革 新たな看護実践に挑む

Transforming Health Promotion Practice:
Concepts, Issues, and Applications

Lynne E. Young/Virginia Hayes 編 高野順子・北山秋雄 監訳
B5判 508頁 定価5,040円(税込) 2008

32名の著者がヘルスプロモーションを多角的に論じた、他に類を見ない著作。
アメリカン・ジャーナル・オブ・ナーシング誌から
二つの賞*を受賞した世界的名著、待望の完訳。

* Community/Public Health and Psychiatric/Mental Health Nursing

主な内容

- 第1部 ヘルスプロモーション実践の変革
- 第2部 ヘルスプロモーション実践を変革するための中心的概念
- 第3部 挑戦と論争：変革的ヘルスプロモーション実践のための知識の再精査と創造
- 第4部 ヘルスプロモーション研究
- 第5部 変革的ヘルスプロモーション実践への批判



日本看護協会出版会 コールセンター(ご注文) TEL.0436-23-3271 FAX.0436-23-3272